

井戸端だより

第96号

発行日：2016.12.21

発行：くらしの学習会

今年もあっという間に1年が過ぎ、あと残りわずかとなりましたが、皆さまはいかがお過ごしでしょうか。

安倍政権が誕生して以来、強行採決に次ぐ強行採決で、問題法案が次々に……という状況が続いているように思います。恐ろしささえ感じます。

アメリカでのトランプ氏大統領選勝利は今後の世界に大きな影響を与えるでしょう。世界の動向の中、日本はどこを向いてどう進んでいけばいいのでしょうか。一国民として冷静な目をもって見つめ、声をあげるところは声をあげていかなければと思う今日この頃です。

さて、第96号会報をお届けします。ご一読いただき、何かを感じていただければ幸いです。どうぞ皆様良いお年をお迎えください。

目次

- | | |
|-----------------|-----------|
| ・ 10・11・12月例会報告 | ……P.2～7 |
| ・ ある会員との出会い | ……P.8～9 |
| ・ 追悼(犬伏武彦先生) | ……P.10 |
| ・ 健康寿命 | ……P.11 |
| ・ 生きることは大仕事 | ……P.12～14 |
| ・ 苦手なこと | ……P.15～16 |
| ・ 大原を訪ねて | ……P.17 |
| ・ 雑感 | ……P.18～22 |
| ・ 県内外国人登録者数 | ……P.23 |
| ・ お知らせ・編集後記 | ……P.24 |



10月例会報告

10月15日（土）愛媛県立長浜高等学校で部活として活動している『ながこう水族館』の一般開館日（毎月第三土曜日）にあわせて訪れることに。その後、昼食を挟んで『しもなだ駅』『翠小学校』へ寄り道をしながらのんびりとした例会となった。

AM9時、中央公民館をメンバー3人で出発。本日の運転はTさん。お天気にも恵まれ川内ICから大洲ICへ。その後、県道24号を長浜方面に向かう。車中では、井戸端会議状態賑やかな一時となった。満々と水をたたえた肱川を左に眺めながら予定よりも早く長浜高校に到着。開館時間11時迄には1時間弱あったので、商店街をぶらぶらすることにした。

まず、「長浜しぐれ」を求めて地元の人お勤めの店へ。各自お土産として購入。初めて訪れた町の路地を歩くのは物珍しく楽しいものである。商店街に行き当たるとあちこちに出店が出ていて普段は寂しい商店街がにぎわっている。カラー舗装された道から山並みと赤橋（長浜大橋）が正面に見える。

※長浜大橋（通称「赤橋」）は、一級河川「肱川」の河口に架かる現役で動く我が国最古の道路可動橋（バスキュール＝跳ね上げ式鉄鋼開閉橋）で、平成26年12月10日、国の重要文化財に指定された。舟運から陸上交通への転換を洞察し、昭和10年8月に県道橋として完成。延長232.3m、道路幅員5.5m、開閉部分は延長18m重量53.6tあり、中央のカウンターウェートの部分が一種の分銅、つまり、オモリの役目をして開閉の作用を軽くする構造になっていて、15馬力の電気モーターで稼働する。

昭和52年12月、交通量の増大と圏域交通体系整備の必要性から下流に長さ333m、幅員10mの新長浜大橋が完成。本来なら古い橋は撤去されるのだが、旧長浜町の要望により市民の生活道路として残された。夏には、イルミネーションで見事な朱色にライトアップされる。また、「肱川あらし」に吹かれる真紅の長浜大橋を求めて、県内外から多くの観光客が訪れる。現在は、日曜日の午後1時から開閉している。

「肱川あらし」とは、秋から冬にかけて大洲市長浜の肱川河口付近で夜間から朝方にかけて冷気が霧を伴って発生する強風のこと。晴れた日の朝、大洲盆地で涵養された冷気が霧を伴って肱川沿いを一気に流れ出す。まさに霧の湖から流れ出す川のように奔流となってゴォーゴォーとうなりをあげながら町をのみ込んでいく壮大な模様は、大自然の神秘を感じずにはいられない。長浜町の住民達が肱川あらし予報情報を発信しているので参考にしてみてもいかがでしょう。肱川あらし予報会HP <http://www.arashi-nagahama.com> ※
(※～※は大洲市観光総合宣伝事業推進協議会発行「長浜」より)

第3土曜日午後1時に開閉するとの情報を持っていたのでスケジュール的に見られないと思っていたのだが、地元の人から11時に開閉されるとの情報に早速、長浜大橋へ向かった。暫くするとメロディーが流れ始め序々に開閉が始まった。写真に収めようと人々が集まってきた。Hさん・Tさんもカシャと。私たちは橋のたもとで見たのだが、橋の中央辺りの部分が開閉するのでその近くだと迫力ある体験が出来るのかも。が、開閉が見られただけでもラッキーだと思うことにしよう。

橋を後に、商店街から見えていた立派な邸宅が気になり尋ねてみた。

※国登録有形文化財「末永家住宅(愛称 百帖浜屋敷)」は、代々長浜で回漕業を営んでいた末永家の「旧主屋(きゅうしゅおく)」と「百帖座敷」からなり、見学できる「百帖座敷」の建築は大正～昭和2年頃、入母屋造り棧瓦葺の建物で、18畳の座敷二間と5畳の次の間から構成されている。床の間のある部屋には合板による折上げ格天井が設けられていて洋風装飾なども見られる。末永家の接客用施設だったと考えられ、地元の祭りや敬老会など集会所としても利用されていたと伝わる※(大洲市教育委員会発行資料より)

実際は44畳、何故、百畳座敷と呼ばれていたのかは分からないが、かつて、渡り廊下で茶室と繋がっていたそうで広々としたお屋敷だったのでそう呼ばれたのかも?二階建ての「旧主屋」は外観に見られる格子付窓・黒漆喰の壁やなまこ壁など、商家らしいたたずまいの建物だった。

『長浜水族館』開館時間も過ぎていたので、長浜高校方面へ移動。学校前

にあるパン屋さんに寄り道。動物パンや食事パンを購入。店内でHさんが、坂村真民さんの書の額が数枚飾られているのに気付き、店主に尋ねると前店主と親交があり頂いたもので、ガラスケースの中には砥部焼の初代青芳窯作の人形がたくさん飾られていて、これらも前店主と親交があり収集したものだそうだ。長浜のパン屋さんで砥部ゆかりの二人の作家作品に出会い、心とむい思いで店舗を後にした。

長浜高校に入ると、ニモ模様のお揃いの法被を着た学生さんに出迎えられ、くじを勧められた。私は「銘菓残月3個プレゼント」TさんHさんは「魚屋さんでレアな長浜話」を引き当てた。建物内には既に大勢の人が訪れ賑わっていた。クラゲの真新しい水槽（中村知事贈呈）を正面に見ながら館内へ。※『長浜水族館』は、昭和10年、長浜高校の北隣に四国初の水族館が誕生。町のシンボルとして、町民に愛される施設だった。しかし、老朽化を理由に昭和61年に閉館。水族館を復活させたいと平成11年に誕生したのが町の有志がつくる「長浜まちなみ水族館」で、個人や事業所の水槽をネットワークで結び、町全体を水族館にしてしまうという画期的な取組で、その中核として校内に『長浜水族館』が誕生した。

水族館部（旧自然科学部）は『長浜水族館』の運営を中心に活動する部活動で、活動の前半は担当水槽の管理、後半は、クマノミ班・イベント班・研究班などに分かれ活動をしている。特に力を入れているのはクマノミ類の繁殖と保護、そして研究。夏休みには、水族館での実習や高知・沖縄での調査合宿なども行っている。

水族館での授業としては、1年生全員が学ぶマリンアクアリウム1。1人1つの水槽を持ち、海の生き物を飼育しながら豊かな自然観を育む。海水魚飼育の基本、地元の魚、サンゴ礁の海、地球環境など幅広く学んでいる。

2・3年の希望者が学ぶマリンアクアリウム2。海の生き物の「繁殖」をテーマに課題研究を行う。これまでにクマノミ類、タツノオトシゴ、フテラホゴン、サンゴなどの繁殖に成功。生き物相手の研究を通して命の尊さと科学的な物の見方を学んでいる。

3年で希望者が学ぶ理科研究。1年を通して課題研究を行い成果を論文に

まとめ学会などで発表する。一連の学習を通して、論理的思考や表現力など総合的な学力を育む。論文はコンクールに出品し、全国入賞、米国への世界大会派遣（詳細は添付の新聞記事にて）など輝かしい成果を収めている。※（※～※の内容はながこう水族館15th Anniversaryより）

余裕教室には、研究資料の展示室、伊予灘・宇和海・沖縄の海の生き物・肱川の生き物の水槽の展示室（クマノミにもニモで御馴染みのオレンジ+白だけではなく、赤+白、黒+白、私好みの黒+薄いアクアブルー等、顔付きもそれぞれ、至近距離でたくさんの種類を見ることで楽しみ方も色々出来、時間を忘れるほど。小さい子供達も目を輝かせて見入っていた）廊下にも手作りの資料が所狭しと展示してある。中庭にはカメ・メダカ・エビ等の池、ジョーズタッチ（サメとエイのプール）、長高タッチ（タッチングプール）等もある。この日は、地元の人が釣ってきた体長60cm以上ある鯛や、薄緑色のヒレが美しいホウボウ等が届けられたり、仮設売店では、先ほど訪れたパン屋さんが作った「水族館オリジナルパン」が販売されていたり、地域密着型の水族館の良さを十分に楽しませてもらった。駐車場を出る際にも学生さんが深々と頭を下げ見送りをする様子に気持ちの良いさわやかさを感じながら、長浜高校を後にした。

長浜町内の食堂で昼食を頂き、しばしの休憩。その後、瀬戸内の穏やかな景色を眺めながら国道 373号を双海方面（沈む夕日が立ちどまる町）へ。かつて日本一海に近い駅（地元出身の知人によると駅のホームに座り海水に足をつけ暑さをしのいだり、釣りをしたり出来たそうだ）として知られ、多くの映画やテレビのロケ地（古くは寅さん、近年では「HERO」、青春18切符のポスターにも3度登場）となった無人駅である『しもなだ駅』の入り口を探す。偶然にも一両編成の普通列車が停車していたのでたどり着くことができた。地元の住民の皆さんがこの地を訪れる人達（北海道から沖縄の人々、海外の人々も）をもてなすため季節の花を植え掃除も行き届いている。駅舎の中には訪れた人々のそれぞれの思いをしたためた沢山のノートが置かれている。最近では、NHK「ドキュメント72時間 海だけの小さな駅」で取り上げられ、観光列車「伊予灘ものがたり」もこの駅に停車をすると聞いてい

る。プラットホームのベンチに腰を下ろし、ただ海を、運が良ければ「夕日百選」の夕日を眺め、何か心の重しを下ろし帰って行く人もいるのだろうか？ などと思いつつ駅を後にした。

道路沿いにある店舗でじゃこ天を購入し、県道 221号を走り『翠小学校』を目指す。映画「陽光桜」のロケ地として有名になった場所。残念ながら土曜日の午後の校庭は誰もいず、門の欄越に赤屋根の木造校舎を見るだけとなった。以前知人が訪れた際、昼休み中だったので校長先生が招き入れてくれ、掃除の行き届いた校舎内の見学ができ、子供達で全ての掃除をしているのだと話されていたそう。都会からの移住者により少し児童の数が増えているらしい。地域の皆で助け合ってこの学校を守っているのだろう。

こうして色々な場所を巡りながら、天気にも恵まれ、東温市への帰路に就いた。Tさん、運転お疲れ様でした。 (A. M)

(3) 総合 2016年(平成28年)7月26日 火曜日 媛 新



シンガポールで開かれた国際学生発表大会で特別賞に輝いた山本美歩さん(中央右)と重松真帆さん(同左)＝長浜高校提供

大洲市長の長浜高校水族館部3年の山本美歩さん(17)と重松真帆さん(18)が24日夜、シンガポールで開かれた国際学生発表大会「グローバル・リンク」に発表。2人は20日、茨城県の科学発表大会で賞を受

長浜高水族館部 山本さん・重松さん 科学部門の特別賞 国際学生発表大会

科学部門の特別賞に輝いた。2人は、マダネシウムイオンがクラゲの発射を抑制することや、クラゲの発光能力にまつわる内容を発表。大会には日本、タイ、台湾、シンガポールの10チームが出場していた。水族館部長を務める山本さんは「発表は練習通りだったが、英語での質疑応答がうまくいかなかっただけに驚きだった」と話し、重松さんは「この国の発表も面白くて感動だった」と振り返っていた。

重松さんと山本さんは2015年、ハタゴイソギンチャクがカクレクマノミを刺さない理由を研究し、米国ピッツバーグであった「国際学生科学技術フェア(ISEF)」で動物科学部門の4等に入っている。(中井有人)

11月例会報告

11月15日、会員4名で鬼北町のNPO法人「ひだまり工房」を見学しました。ここは「障害のある方とご家族が、鬼北町で生き甲斐や働き甲斐を持てる居場所を提供する」という目的で平成22年にNPOとして認証されました。

ここでは障害のある方の可能性を広げ、社会でのステージを向上するために次のような様々な取り組みが行われていました。

- ① 手作り菜宴あう（お弁当専用）
- ② 手作り菜宴あう（レストラン）
- ③ 「雑貨パーティ」手作り雑貨製作・販売
- ④ 「みもぞパン屋」パン製造・販売
- ⑤ 放課後等デイサービス「こどものおうちパーティ」
- ⑥ シェアハウスみもぞ
- ⑦ 相談支援事業所「叶う」

代表の方は障害児を持つ親として●決して一人ではないということ●働くことを前提に育てることが必要だということ●健常者との区切りはないのだということ等、ひろく人々に伝えたいと言われていました。私達は1時間ほどお話を聞いて②のレストランで食事をし、⑥のパン屋さんでお土産を買って帰ってきました。代表の方のエネルギーで明るいお人柄に心が温かくなりました。（K・K）

12月例会報告

12月13日林宅で例会を行いました。参加者は5名。K・Kさんを中心に作成販売した本『蝶のくる庭』の報告、今後は面河博物館においてもらっている分を細々と販売するという、また、林宅に大量保管していたくらしの学習会が泉を守るために作成した、今やかなり様相を変えてしまった三ヶ村泉の絵葉書、会報50号の時に作成販売したジャコウアゲハの絵葉書の在庫を処分することにしました。三ヶ村泉の絵葉書は、図書館でほしい人に自由に持ち帰ってもらうことにしました。ジャコウアゲハの絵葉書は、会員で分けました。

その後、上林の家庭料理レストランで忘年会をしました。天気は今いちでしたが、皿ヶ峰や畑を借景にのんびり皆でおしゃべり、お食事、デザートを楽しみました。（T・H）

ある会員との出会い

2011年3月11日～31日の間、くらしの学習会が「蝶のくる庭 ～庭で楽しむジャコウアゲハ～」のパネル展を中央公民館で開催した。その時に、声をかけて下さったのが、A・N氏との出会いだった。

ノートには、《～～蝶の生活形には特異なものが多く興味の尽きないもの。また、羽化するときの感動は何ものにも代えがたいものがあります。このようなかでこれだけ写体を捉えたことに敬意を払います。絵ハガキのジャコウアゲハ良いですね～～》と感想文を書いて下さった。

早速、4月の例会に来ていただき、お話を聞く機会を得た。その時、島根大学（国立大学法人）学長特任 講師の名刺をいただいた。愛媛県緑化センター（現森の交流センター）の所長をしていた当時、環境に配慮した植物公園の設立に尽力されたこと、渡り蝶の「アサギマダラ」のマーキングをし、生体の研究をされたこと、丹原町来見には名桜「陽春」の原木があり、また「平和の使者陽光桜」の話など、私たちの住む近くの情報は興味深かった。後日、くらしの学習会の希望者に「フジバカマ」の苗をいただいた。

或る日、散歩しているA・N氏にばったりお会いした。近所の空き地や我家の庭でウマノスズクサを植え、ジャコウアゲハを育てている所をみてもらった。まだまだ暑い時期で、畑で育てた赤紫蘇ジュースをお出しした所大変喜んで下さり、ぜひレシピが欲しいと。「ぜひとも家へも。」ということで、会員のK・Kさんとお訪ねした。早速奥様がジュースをご馳走して下さいました。

くらしの学習会の会報「井戸端だより」第81号から、趣味の短歌を毎号投稿して下さいようになった。ご家族をはじめ、昆虫・小さな生き物・植物などに優しい眼差しが向けられていた。

その会報を毎号お届けした。奥様が「お父さん、Kさんよ。」と奥へ声をかけると、裏庭から作業服姿でひょっこり顔を出し、しばらく庭を眺めながら立ち話をしていた。帰り際には北海道出身だという奥様から珍しいものを「おすそわけよ。」とよくいただいた。何度か伺ううちに「庭木の整理をしている。」と大きな木が少なくなっていた。でも、道端の数個のプランターには、折々の花を咲かせていて、道行く人達の笑顔が浮かんでくるようだった。

そして、我が家から株分けしたウマノスズクサが玄関わきの日当りのいい場所に根付き、蔓がかなり茂った頃、持って行ったジャコウアゲハの幼虫が

羽化し「卵を産み付けた」「20 頭以上成虫になった」とメールが入ったこともあった。その外、カブトムシ・鈴虫の飼育もされていたようだ。

短歌の内容から、お加減が悪いのだなと思っていた。でも「元気です。」「外来で対処しています。」ということだったのであまり重くは受け止めていなかった。

9月、会報「井戸端だより 95号」が出来上がり持参した。奥様が慌てた様子で玄関に出てきた。「今、病院から電話があり主人が危篤だと！！！」翌日、新聞の訃報欄でお名前を見つけた。2016.9.22 没 満 70 歳

9月11日と原稿締め切り日をお知らせすると、8月30日には短歌10首がファックスで届いた。添え書きがあった。

《私は病人ですが元気です。こんな表現も許されるかも？外来治療で半年を越えました。今や、生涯現役でなく病氣と付き合いながら元気で日常を配偶者と過ごせたら幸せというものでしょう。私は、生物を友として過ごすことにします。生物の多様性を考えながら科学の進歩まで見据えて、なまじ虚しく他方楽しく生き甲斐に「花咲か爺」となって道行く人々の癒しの一助となれば望外の喜びです。いま、たちまちの目標は「私流花暦」を3ヵ年くらいかけて仕上げてみたいと思っております。》と。

告別式で、お孫さんはおじいちゃんの遺影に呼びかけた。

おじいちゃん、いつもおさんぼにつれていって来てくれてありがとう。

こうえんであそんでくれてありがとう。

にわでおはなのことをいっぱいおしえてくれてありがとう。

てんごくへいってもわたしのことをみまもっててください。

7歳のお孫さんは「私も言いたい。」と自分から進み出たそうだ。

A・N氏から頂いた「フジバカマ」が、今年もたくさんの花を咲かせている。いい匂いが漂い始めた。今年初めて「アサギマダラ」が2頭飛んできた。

しばらく経って、お渡しできなかった「井戸端だより 95号」を仏前にお供えしてきた。笑顔の遺影が迎えて下さった。

(S・K)

訃報

くらしの学習会会報井戸端だより第 25 号掲載出会い塾講師としてお世話になった犬伏武彦先生が、12 月 10 日にお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りします。(詳細は愛媛新聞切り抜き参照)

古建築研究家 犬伏武彦氏が死去



民家など伝
統建築の研究
家として知ら
れ、古建築の

修復や活用に尽力した元松
山東雲大特任教授の犬伏
武彦(いぬぶせ・たけひこ)氏
が10日午後0時7分、呼吸不
全のため東温市の病院で死
去した。75歳。大阪府高石市
出身。自宅は東温市田窪23
24の25。葬儀は12日に営ま
れた。喪主は妻のゆき子さん。

大阪工業大工学部建築学
科を卒業後、松山工業高や
東予工業高で教諭をこな
から、県内各地の民家・古
建築を訪ね、調査研究に
力を注いだ。2002年に
高校退職後は、松山東雲
大特任教授を10年間務め
た。

江戸後期の庄屋屋敷で四
国最大級のかやぶき木造民
家、土居家(西予市野村町
悠川)の修復に携わったほ
か、江戸期の俳人栗田樗堂
(きよたか)が建てた原史

跡の庚申庵(こうしんあん)
||松山市味酒町の修復に
取り組んだ。また松山市の
道後温泉本館保存修復計画
検討委員会の会長として報
告書をとりまとめ、市に答
申した。

建築や文化に関する著作
も多く「南海僻隅(へきぐ
う)の疍蛙(ちのめ)なれど」
で1994年に愛媛出版文
化賞受賞。
犬伏氏と共に長年、民家
研究に取り組んできた県建
築士会文化財・まじつくり
委員長の花岡直樹氏(58)は
「建築関係者だけでなく、
広く一般に良い建物と建築

文化を知ってもらおう手法を
確立させるなど、大きな功
績を残した」と振り返り、
「決して偉そうにせず、周
囲の能力を引き出す魅力が
あった」としのんだ。

健康寿命

「三食昼寝付き」とか、「亭主元気で留守が良い」の言葉を、私にこの様な生活がいつ来るのだろうと思う時代もあった。

80歳代になって脳梗塞を患い、思う様に体が動かなくなり、ちょっと動くと「ああ、しんど」という有様で、「三食昼寝付き」そのものである。一日中テレビ人間となり、歌番もクイズ問題も一緒になり、テレビと会話している生活である。「まあいいか。82歳まで頑張って生きて来たのだから」と思っていたら、ある日のテレビ番組ドキュメンタリーが放映された。

京都の山里で、86歳、88歳、92歳の老女三人が、栃の実を使ったお菓子作りに励んでいる姿だった。毎朝、空家に三人が集まり、一日の計画を立て、先ず栃の実を拾いに山へ上り、栃の実を袋一杯になるまで拾い帰って来る。次に青いシートに栃の実を並べ、自然乾燥をさせる。よく干したら挟む道具で、皮と実に分け、実だけ集め水につけあくを抜き、柔らかくなるまで煮て、細かく潰す。次に粉を混ぜ、平らに延ばし、煎餅の様な型に切り、炭火で焼いて出来上がり、他にあられやクッキーも作り、小さい袋に入れリボンでしめて完成。道の駅等で、飛ぶ様に売れ、製品が間に合わない状態だそうだ。

一日中動き回って、元気で働ける事が幸せであり、長生きの秘訣だと笑っていた。これこそ健康寿命の生き方だと拍手を送り、私の生活を反省はするが、手も足も出ない。諦めムードになりながらも、一日は、チューリップを百球位植え、「ああしんど」次の日は掃除機をかけて、腰が痛いのによく頑張ったと自分をほめ、夕食も作れたと一日自立した生活が出来た事に感謝している。

でも、血圧が高く動脈硬化症なので、月一回の病院通いと薬を飲み続けている。又涙がポロポロなので眼科にも通い、医療費は驚く程の金額に。これでは健康寿命とは言えないと、思いながら生きている。私の姉は85歳だが、プールに通い水中ウォークに励み、駅までもよく歩くので、一年に一回位しか病院にも行かないと喜んで見ると、栃の実の老人も姉も、よく歩きよく動く事が長生きの元である事は分かっているが、仕方ない。自分の体に諦めムードの毎日である。

平均寿命まではまだ4年もあるが、体も頭も健康で居られる様に努力しかないのかなあと思いながらこの原稿をやっと書き終えた。(Sa・K)

生きることは大仕事

平成 28 年 7 月 29 日午前 1 時 31 分、姉が 96 才で黄泉の国へ旅立ちました。大正に生まれて、激動の昭和を生き、平成の世になっても働きづくめの人生でした。私とは 18 才違いで母のような存在でした。今回入院して 1 週間で逝ってしまい、あまりの慌ただしさに心痛みますが、天寿を全うしての大往生であったと思います。

私が 5 才の時、日本専売公社（タバコ）の人と結婚し満州へ渡ったので、幼い時の思い出はあまり覚えておりません。子供もなく体の弱い姉でしたが、命からがら義兄より一足先に引き揚げてきました。そして 85 才まで 1 人でタバコ店を営んでおりましたが、齢と共に独居に不安を抱いたようです。丁度その時、病院に併設された「シルバーレジデンス」という老人マンションが新築されたという情報が入り、第 1 号で入所しました。私は住み慣れた所が一番だと、転居には反対でしたが、今では良い選択だったと思っています。

最初はさびしいのか、島流しにあったようだ等とっておりましたが、女学校の後輩の方達も入居され、新しい環境にも慣れ次第に明るい顔になりホッとしました。お風呂も 1 人で入り、洗濯も機械で乾燥までして、ヘルパーさんは週 2 回、掃除機が重たいので助けてもらうのと、買物だけ頼んでいました。週 3 回来てもらうようにしたらと言うと「時間がかかっても、自分のことだから少しずつでも努力して自分のことは自分です」と、37 キロの体重で最後まで要支援 2 で頑張りました。

こうして最後までボケないでトイレに行ける人生を送ることができたのは、週刊文春や新聞を読み、94 才の時、終戦特集に「薄れゆく思い出」として愛媛新聞に掲載されたり、常に社会に目を向けることを忘れなかったせいでしょうか。18 年後の私にはとても出来そうにはありませんが、目標にしたいと思っています。それと、デイサービスに行くのを嫌がった姉が、書道のある日には進んで行き、気が向いたら平日でも練習して、3 重丸がつくと嬉しそうに見せてくれたこと。中四国で優秀賞に選ばれた時「お歳のせいで選ばれたのじゃない？」と言うと、ご機嫌斜めでした。体に似合わぬ力強い字「迎春」を書いており掛け軸にしてくれたので実家に掛けています。又お茶の好きな姉は、夏はサイダーや梅酒を入れた水羊羹を作り待っていてくれました。顔を見ると、氷を入れたお煎茶と共に、出してくれたものです。

そんな気丈な姉も人間としての年齢には勝てず、今年に入って「足が痛い・のどが痛い・目が見えにくい・補聴器をつけても調子が悪い」と言うようになりました。

「静江も 96 才になったら分かるよ『生きる』ということは大仕事よ」、「何も悪いことをしていないのに、なぜお迎えが来ないのかな」などと弱音をはくようになりました。

死の 3 日前、博行・芳治・奏晴(弟たち) がこっち向いて居たの」と言うので「良かったね、皆んなに会えて」と言うと、何か言いたそうにしたので、あの事だと気づき、顔をくっつけて抱いてあげ、耳もとで「姉さんは柴田家のお墓に入ろうね。ご先祖さまと一緒にお茶湯するからね」と言うと「ああ良かった。私の位牌はどこに入るのかと心配してたの」と言い「私はこれでお終い」と言って両手を合わせ、横に一の字を書くように開いて眠りに落ちました。

姉は仏式で葬儀をすると後のお祭りが大変だから、洗礼を受けてキリスト教でしようかなどと言っていました。私が「死んだ後の事は、生きている者のつとめだから任せて」と言って、はっきりした返事をしていなかったのです。今まで通り菩提寺である宗光寺のお世話になり近親者のみで黄泉の国へ送りました。

金曜(午前 1 時 31 分死亡)、土曜(通夜)、日曜(葬儀)と皆、会社を休む事も無く集まる事ができ、姉を偲び有意義な時を過ごすことができました。

姉が死に向かって起こした行動

- ・白菊会に入会し献体しようとしたが兄弟の同意が得られず断念する。
(親族 2 人の保証人がいる)

- ・公正証書遺言を八幡浜公証役場にて作成する。
近親者全員に心くばりがあり、姉のやさしさに触れました。

- ・尊厳死宣言書を兄弟に見せ、主治医にも話していた。
延命治療はいっさい行われず、痛みだけ緩和された。

- ・葬儀について
香典は誰からも受け取らないで下さい。子供がないので私で終わりです。近親者のみで行い、なごやかに送って下さいと書いてありました。写真は黒枠で作ってありました。本当は仏式でしたかったけど、私が大変だと思って迷ったのでしょう。今は安らかに眠っている事でしょう。

追記 入棺の 姉の茶道具 虫しぐれ

・姉の逝った日の朝、お茶の友達から、元気になられたら、又お茶をご一緒するのを楽しみにしていますと、手紙が来ました。必ず返事を書く人でしたから、かなわぬ夢となった事を知らせると、ひと目お別れだけでもと来られました。入居してからも続いた仲良し3人組でしたから、これも良しとしましょう。

・主治医の理事長先生も丁重にお断りしましたが、来て下さっていました。本当に根気よく姉の言う事を聞いて下さり、精神的にどれだけ救われたことでしょう。今では医療の本質から遠ざかった現場が多い中で、このような先生にめぐり会えた姉は幸せ者でした。

・姉の同級生の老医師が後日訪ねて下さり、遺骨の前で「長生き競争をしようと言ったのに、先に行ってしまうと、1人になってしまった。これから学芸会で唄った赤トンボを歌うからな」と言って大きな声で、歌詞も正確なのに驚きました。謡曲をなさっているせいかメロディに乗った素晴らしい歌声に姉もさぞ喜んだ事でしょう。姉の遺影が笑っているようでした。

平成 28 年 12 月 15 日記 S・M



苦手なこと

誰しも、思い出したくない思い出があると思う。

私のそれは、「水泳」。私が通った小学校には、プールがなく、私たちが6年生の時にはプールの工事中だったが、卒業後に完成したので、小学校の授業では、水泳はなかったと記憶している。わんぱくな男の子達は、池や川で泳いでいた。私は、池や川に行くことがなかったので、中学校へ行ってからの水泳の授業が苦手で苦痛でならなかった。

中学校では、一年に一度、夏休み明けに、水泳大会が行われ、全校生徒が出場しなければならなかった。水泳が得意な子は、選手として泳ぎ歓声を浴びることができる。私は苦手なので、25m プールを横に泳ぐ種目に出ていた。それは、種目と言えるものではないが、全校生徒が参加という行事なので仕方がなかった。種目にでない人は、競泳種目の後、学年毎に男女に分かれて泳ぐのだが、プールを横に泳ぐという屈辱に耐えなければならなかった。その頃の私は、超真面目な中学生だったので、水泳大会の日に欠席するというのを思いつかなかった。三年間、真面目に屈辱の横泳ぎ種目に出ていた。

一年生、二年生と学年が進み、三年生の水泳大会でも、横泳ぎグループにいた。毎年のことなので、嫌だったが、泳ぐつもりだった。ところが、どういう訳か、この年は、途中で立ってしまって泳げなかった。帰宅後、同じ学校の一年生にいた妹が、「なんで、プール、途中で止まったん？横やのに」と笑いながら訊いた。泳げなかったという恥ずかしい気持ちをなんとか押さえて、帰宅しているにも関わらず、妹の心ない言葉に深く傷ついた。それ以来、中三の「水泳大会」は、思い出したくないことになった。泳げなかった私の姿が強烈だったようで、妹の脳裏には、はっきりと残っているらしく、最近になっても「あの時、どうして立ったん？」と訊かれる。

夫に誘われて、ジムに行き始めて、一年半になる。今年の夏、プールで歩いてみようと思い立った。週に二、三回、歩いていると、顔見知りになった人から「泳がないんですか」という声がかかった。「よかったら このゴーグルを使って」と。泳ぐつもりはなかったのに、ほとんどの人がゴーグルを頭にのせているにも関わらず、私はゴーグルなしで歩いていた。

「すみません。私、泳げないんです」と言ったのだが、「どうぞ」と言って手渡された。笑顔で、「ありがとうございます」と答えたのだが、苦手な水泳の思い出が浮かんできた。泳ぎたくない。でも、さて、どうしよう。折角のゴーグルを・・・

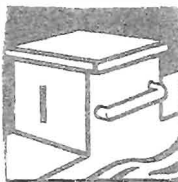
後日、プールに入った日、頂いたゴーグルを付けてプールに入った。まず、歩こう。それから、バタ足練習でもしてみようという気になり、バタ足練習を始めることにした。歩いた後、バタ足練習をしていると、次は、ちょっと泳いでみようと思い、絶対無理だと思っていたクロールの練習を始めた。私の泳ぎは、練習を始めたばかりの新人だということは、誰が見てもわかるらしく休んでいると声がかかる。泳いでいる人は、10年15年というベテランが多くアドバイスも上手だ。7年目だという人のアドバイスは、「一年目は、私も苦労した」という言葉。

泳ぎ始めてもうすぐ三ヶ月、決してカッコいいとは言えないが、クロールで、25メートルは泳げるようになった。息継ぎ、手の形、バタ足の形、どれをとっても決してスマートではないが、日々の練習で少しずつ、上達しているような気がする。息継ぎの時の頭の位置、手の入れ方などの細かいアドバイスを忘れないようにしながら練習をしている。沢山課題がある。でも、どういう訳か、課題があることを楽しめるようになってきた。

還暦を迎えてから水泳の練習をするようになるとは、考えもしなかったが、一年半前からジムに行くことが生活の一部に加わったことで、今年は、水泳に挑戦ができた。水泳をしたあとの爽快さを知り、苦手意識が薄れている。できなかったことが少しでもできるようになるのは、実に、楽しい。

若い頃は、なんでもできる人がいいと思っていたが、苦手なことがある方がいいのかもしれない。あれも、これも、できなかったことをやってみたいと思う。

(M・T)



大原を訪ねて

ほととぎす治承寿永の御国母三十にして経よます寺

与謝野晶子

この御国母とは建礼門院のことであった。平清盛の娘徳子、高倉天皇の中宮である。八歳の幼帝安徳天皇に次いで壇ノ浦の海に入水。しかしその長い黒髪は、敵方源氏の海を掻く熊手に引っ掛かる。義経に連行され再び京へ。得度した後寺伝によれば36歳で生涯を閉じる。その最期は都より十数キロの大原の里での隠棲、かの寂光院の傍らに結んだ庵であった。亡んだ平家一門の菩提を弔う日々であった。

この悲しい女性の歴史悲話が、いかようにであろうか投影され、永六輔の「女ひとり」、京都大原三千院、恋に破れた女がひとり……の誰しも知る名歌としてなったのでは？と。歌碑が建てられていた。

さて、私は「平家物語」を書きたくてペンを執ったのではない。初夏の大原は又一段と空気は澄み、比叡のふもと、広がる山地と田園は、どこを取っても絵葉書になる。ハッと目を引いたのは、陽光に冴える広い紫蘇畑であった。列も整然と幾筋も長く続いている。まだ低く幼い紫蘇ながら、その色彩はかえって鮮やかである。涼しい山里の微風に、柔らかい赤紫の葉が一面にそよいで止まぬ。私はこれが見たかったのだ。これ以上のものを大原に求めはしないと。この色彩が、数ある京漬物の中でも代表格のしば漬の美しい色になってゆくのだと思った。立並ぶ土産店はしば漬しば漬。私はここ大原に来るまで、柴漬と書くものと思っていた。店頭にあったしおりで知った。都より辺地に来た悲劇の御方を少しなりともお慰めしようと、村人らがその地の胡瓜、茄子、茗荷、土生姜などを漬け、紫蘇の色と香を付け差し上げたところ、大層愛で、「紫葉漬と呼びましょう」と。大原産のしば漬は、こうして紫葉漬と書かれることになったと。

大原の地は仏教の声明でも重要な土地である。音楽についても全くの素人で、よく伝えられないことを詫びたい。

紫蘇畑の匂う大原三千院

石井 保

(M・D)



雑感

毎年思うことですが、あっという間に今年も終わろうとしています。

順番とは言え気楽に引き受けてしまった今年度の婦人会の仕事。

夏から晩秋のおよそ半年間は、私の最も苦手とする“踊り”を5つも覚えることになり、寝ても覚めても踊りの事が頭を離れませんでした。右と言われると左に、左と言われると右に身体が動いてしまう私は、その度に慌てて軌道修正。足の裏にいくつものマメを育てることになってしまいました。

心配していた十五夜祭の段取りも班の皆の手助けのおかげで何とか必要なものを無事そろえることが出来ました。前日から支度にかかりましたが、作り始めると、何と手際の良いこと。流れるような仕事ぶりは見ていて惚れ惚れしてしまいました。

お供え物のお花は花瓶ではなく一升瓶に活けること、里芋や甘藷はセキナムンと呼ばれる東温市ではジョレンと呼んでいた穀類の選別用農具(箕)に盛り付ける、など初めて知ることには吃驚もしました。セキナムンは古くからのお家の方に拝借しました。最近では綾でもセキナムンを持っている家は少なくなったそうです。

ススキやハギを活けた一升瓶を見て「酒瓶なんかに活けて。誰か花瓶を持ってこんのか」と呟いている男性役員がいました。彼もきっと他所から移住した人なのでしょう。

綾の暮らしに根付く文化や歴史の一端を知る良い機会になりました。

此方での生活も6年目に入り、解っていると思っていたこともいざやってみると解らないことばかりで右往左往する私を、時にはからかいながらも、細かく、でも、さりげなく目配りし、適切なアドバイスをしつつ受け入れて下さった地区の皆さんに感謝です。

夏には私の不注意から高齢の飼い犬の大五郎が熱中症になってしまいました。

秋風と共に少しずつ回復し、少し安心していた頃、食いしん坊の杏が食欲不振に

なり食事を残すようになりました。最初は私達が大五郎にばかり気をとられているので寂しくなったのかと思っていましたが、その内、尻尾から後脚にかけて汚れが目立つようになり、獣医さんに診て頂くと子宮蓄膿症との診断。緊急手術となりました。2泊3日の入院でしたが、経過が良く今はすっかり元気です。

大五郎は機嫌よく過ごしてくれてはいますが、やはり、後ろ足が不自由で、甲で歩くことが多く、歩いている時間が長いとしゃがみこんで動けなくなってしまうことが多々あります。

日に何度かのマッサージをしていると気持ち良さそうに眠り込む姿を見ていると、忙しくてもやめられません。

今までなら、夜は私達のベッドに上がって寝ていた大五郎と杏。大五郎が上がる事が出来なくなつてからは杏も大五郎と一緒にカーペットで寝る様になっていました。でも、手術の時に剃った毛が生えそろっていない杏は先日の急な冷え込みに耐えられなかったのでしょうか。ベッドに上がってきていました。

大五郎は13歳10ヶ月、杏は5歳10ヶ月になりました。

横浜での福島から避難して来た児童に対するいじめに関する報道の後、各地での同じようないじめの記事が後を絶ちません。信じられないことです。自分に何の落ち度がないにも拘らず、故郷を追われて不慣れな土地での生活を余儀なくされている人達。どれほどの哀しさ辛さ不安を抱えて新しい土地にやって来たのか。そんな児童や生徒をいじめる。人間として恥ずかしいことです。怒りで身が震えます。

あの事故は国策で行ったエネルギー政策の一環の原発事業が如何に矛盾だらけであったかを私達に突き付けたものでした。責められるべきは国策として推進してきたリーダーたちです。安全で安いというゴマカシにうかうかと乗せられ、電気製品を次々に手に入れ、便利と快適さを享受した私達にも責任があります。

労わられるべき避難家族を差別し、いじめる。大人達の日常の会話や考え方が子供たちに多大な影響を与えています。

しかしこのようなことは福島からの避難者に限ったことではありません。

病気を抱えている人、障害を持っている人、貧困にあえいでいる人、様々な立場の人たちが謂われの無い差別に苦しんでいます。

私達大人が子供たちに伝えなければならないことは何か、真剣に考えなくては益々息苦しい世の中になってしまいます。

私達大人の暮らしぶりを子供たちはその純粋な目で見、心で感じています。

高齢ドライバーに因る事故が相次いでいます。

いかに自動で危険を回避することのできる車を普及させるか、免許証を自主返納してもらうための様々な取組み、免許証の更新の際の検査の徹底など、毎日のように報道されています。

いずれも大切なことだとは思いますが、街の造りが昔とは大きく変わってしまった今、車を手放すのは容易なことでは無いと感じています。

60余年前、私が幼かった頃、自宅の周りには、銭湯・食堂・燃料店・お肉屋さん・魚屋さん・お豆腐屋さん・八百屋さん・果物屋さん・お菓子屋さん・文房具屋さん・遊び道具も置いてある駄菓子屋さん・時計屋さん・石材店・本屋さん・洋裁や手芸の店・理髪店・美容院・荒物屋さん・医院・歯科医院・郵便局が揃う商店街が徒歩生活圏に存在していました。

車は贅沢品であり、生活していく上の必需品ではありませんでした。

何時の頃からでしょうか。軽自動車が普及し始めた頃から次々に個人商店が姿を消し、駐車場を完備した大型店舗が台頭してきました。

その頃から、家庭の冷蔵庫もどんどん大きくなり、毎日出かけていた食事の為の買い物も、計画的に週に1~2回行くのが賢い主婦だと喧伝されるようになりました。

本当に大型店舗化の街創りは正しかったのでしょうか。

望めば、一言もしゃべらないで済む買い物。

私にコミュニケーション能力が有るとするならば、商店街での店主とのやり取りによって培われた部分が少なくないと感じています。

お鍋を持って買いに行っていたお豆腐はパック詰めされ二重三重にプラスチックの袋で装備され水がこぼれることなく持ち帰ることが出来ます。剥板に包んでもらっていた肉や魚もプラスチックトレイに乗せられています。

地球温暖化が懸念されるようになったころから、過剰包装をやめようという動きが活発になってはきましたが、それでも今でもプラスチックゴミは無くなること

は有りません。

好きな時に、家から直接目的地まで。雨が降っても濡れることは無く、買い物が増えても重たくない。

ウォーキングはするけれど、歩かない、そんな習慣が身に付いてしまいました。

車には、一度手にしたら、手放せない魔力があります。それが、町の構造上、車が無いと生活できそうもないというお墨付きまで与えられ、自身の体力低下も加われば、よほどの覚悟がないと手放せるものではありません。

体力同様、判断力も運転技術も低下しているのですが、それは認めたくはないのです。

私のように、運転が苦手だと自覚している人間でさえ、68歳にして未だ運転しているのが現状です。

今の自宅を終の棲家と決めた時、家から徒歩で数分のところにバス停がありました。1~2時間に1本位の頻度でしたが、それでも、車を手放しても生活できると判断して決めた場所でした。それが、引っ越してきてみるとバス停が無くなっていました。我が家から20分弱の所でUターンすることになっていたのです。我が家は綾の大吊橋への途中にあります、綾の大吊橋への乗客が減少したことが原因の様です。

現在の高齢ドライバーによる事故多発は起こるべくして起こっているのかもしれない。

役場の投書箱にコミュニティーバス導入の要望書を投函しましたが、綾町はタクシー券を配布しているので、それで良いと考えているようです。現実には、タクシー券を利用している方にお話を伺うと、タクシーの台数が少ないので、なかなか利用できないとのことでした。

今年のような忙しさからは解放されることが予想される来年度、徐々に徒歩とバスでの買い物を試してみようと思っています。少しずつ慣れておかなくては免許証返納が現実のものになった時、生活が成り立たなくなります。

より快適に、便利にと願い追い求めた結果、楽の後に苦が待っていたのです。

今年も終わりに近づき、矢継ぎ早に 11 月 4 日、TPP 承認案が可決され、11 月 15 日、安全保障関連法に基づいて、南スーダンの国連平和維持活動(PKO)に派遣する自衛隊に駆けつけ警護の任務を付与することを閣議決定し、12 月 15 日、カジノを含む統合型リゾート推進法案が可決成立しました。

政権与党に吃驚するほど多くの議席を与えたのですから、何を可決成立させても驚きはしません。でも、何故、これほどまでに急ぐのでしょうか。私達の国を、生活を、どのような方向に持って行きたいのか説明位してくれば良いのに、と思います。与党、特に総理の説明は常にはぐらかされているような感じがしてしまいます。済崩的に何かとんでもない所に連れて行かれるのでは、と、勘ぐりたくなくなってしまいます。

忙しかった今年は今までのように時間を気にせず家の周りの鳥や昆虫、植物を求めてウロウロすることが出来なかったのも、それが少し残念でした。

それでも、自宅庭で小さなアイナエを、近所ではもっと小さなザクロソウを、そして可憐なマルバツユクサやアメリカイヌホオズキを見つけることが出来ました。

鳥からの贈り物のカラスザンショウが今年初めて花を付け、今は黒い実が沢山出来ています。

紅葉狩りには出掛けることが出来ませんでした。2 本ある庭のナンキンハゼの 1 本が、実は付けませんでした。葉は美しく色付きました。もう 1 本は色付く前に葉を落としてしまいましたが、白い実を沢山付けています。両親を見送った後、呉の街でぼんやりと佇んだ私の傍で白い実を真赤なりボンで束ねたようなナンキンハゼの美しさに慰められた 14 年前。その実を拾って育てたナンキンハゼです。あの姿をもう一度見たいと思っています。

今年も、まだまだ、葉を付けている木が多く、様々な鳥たちのお喋りは聞こえてもなかなか姿を見られないのが残念ですが、庭のイチョウでジョウビタキが遊び、裏の木立の杉の木のとっぺんにイカルがとまり、緩南川上空を、獲物を探してミサゴが旋回し、近所のまだ蕾の硬いツバキに沢山のメジロが群れ、お隣のエノキには忙しそうに枝から枝へ飛び移るエナガらしき鳥の姿が有り、近くから、遠くからヤマガラやシジュウカラの独特な鳴き声も聞こえてきます。

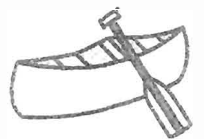
来年はどんな年になるのでしょうか。穏やかな日々を願っています。(K.O.)

県内外国人登録者数

平成28年4月1日現在 EPIC調



順位	国籍	人員	順位	国籍	人員
1	中国	4,361	40	ハンガリー	4
2	韓国・朝鮮	1,328	40	ボリビア	4
3	ベトナム	1,324	40	マラウイ	4
4	フィリピン	1,320	40	メキシコ	4
5	インドネシア	362	48	オランダ	3
6	ブラジル	193	48	ドミニカ共和国	3
7	米国	187	48	トルコ	3
8	タイ	159	48	ナイジェリア	3
9	ネパール	109	48	ベネズエラ	3
10	台湾	107	53	イスラエル	2
11	カンボジア	85	53	キューバ	2
12	インド	69	53	コロンビア	2
13	英国	50	53	スイス	2
14	マレーシア	45	53	スウェーデン	2
15	オーストラリア	41	53	セルビア	2
16	カナダ	33	53	チェコ	2
17	ペルー	30	53	フィンランド	2
18	フランス	27	53	ブルガリア	2
19	ニュージーランド	22	53	ベラルーシ	2
20	ミャンマー	21	53	ベルギー	2
21	バングラデシュ	19	64	イエメン	1
22	パキスタン	18	64	イラン	1
23	エクアドル	15	64	ウズベキスタン	1
23	ロシア	15	64	エストニア	1
25	ドイツ	14	64	オーストリア	1
26	スペイン	13	64	シエラレオネ	1
27	モンゴル	12	64	シリア	1
28	イタリア	10	64	スーダン	1
28	ウガンダ	10	64	スロバキア	1
30	パラグアイ	9	64	セントルシア	1
31	ケニア	8	64	タンザニア	1
31	ジャマイカ	8	64	デンマーク	1
31	モザンビーク	8	64	トリニダード・トバゴ	1
31	スリランカ	8	64	バルバドス	1
35	ラオス	7	64	ポーランド	1
37	アルゼンチン	5	64	ホンジュラス	1
37	南アフリカ共和国	5	64	マダガスカル	1
37	ルーマニア	5	64	モルドバ	1
40	アイルランド	4	64	モンテネグロ	1
40	ウクライナ	4	64	リトアニア	1
40	エジプト	4	-	無国籍	9
40	シンガポール	4	総計(82カ国と1地域)		10,160



お知らせ

・総会のお知らせ

総会は、1月10日(火)午前10時～ 林宅で行います。2016年度会計報告、活動報告、2017年度活動計画など話し合います。

また、総会終了後はささやかな新年会です。多くの方のご参加をお待ちしております。

くらしの学習会では、随時会員を募集しています。

活動会員 2000円/年 購読会員 1000円/年

振込先口座番号(郵便局) くらしの学習会 01610—5—21026

問い合わせ先 TEL/FAX 089—964—6956(林)

E-mail: kt-hayashi@gifty.com



編集後記

訃報が続く中、私事ですが今年は我が家にとっては最高に幸せな1年でした。待ちに待った初孫の顔を見ることができたのです。9月19日に自然分娩 3060gで生まれた元気な男の子です。何とその親たちの1年前の結婚式の日に狙ったようにお目見えしました。母親もやはりその両親の結婚式の日に生まれたそうですから、何か不思議な縁を感じます。

生まれた次の日に飛行機に乗って会いに行きましたが、何と台風の影響で飛行機が飛ぶかどうか心配な中、台風の間をぬうようにしてたどり着き、無事御対面を果たしました。初めて抱いた孫は小さくて、泣き声もまだ弱々しい感じでしたが、その後、お七夜で再び会ったときは、力強い泣き声で、手足の動きも活発になっていました。一週間でこんなに成長するのかと離れているせいか痛く感心しました。1か月後、お宮参りにも行きました。父親側の母親ということで、彼を抱き、着物を肩から掛けて御祈祷を受けました。よく大声で泣くようになっていたので、御祈祷の間大丈夫かと心配しましたが、いい子にしてくれてホッとしました。時折送られてくる写真をプリントアウトして、毎日眺めてはニヤリとしています。次はお食い初めに会いに行きます。

今年もお世話になりました。来年も何とぞよろしく願いします。

皆さまのご健康と多幸を心よりお祈りします。

(T・H)

